供えモチにみる社会構造の象徴性
―山梨県東部源流域山村の事例から―

社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了
立柳　　聡

要旨

山梨県の東端部、小菅村に位置する自然村（ムラ）の一つである小永田は、伝統的に麦や様々な雑穀の栽培を主体に人々が暮らす畑作農村であった。これまでの民俗調査により、ここでは、各戸の正月の神棚の供えモチをめぐって、いくつかのバリエーションが存在することがわかってきた。また、ムラの社会構造の重要な特色として、山中に麦の栽培に有利な土地を多く所有した家が経済的に優位に立ち、他の家を小作として雇うなどして、家格差を生み出してきたとみられることや、それに基づく階層が存在することも見通されるようになった。そこで、両者の間に何らかの相関が認められるのか否かを検討した結果、民俗として伝承されてきたそれぞれの供えモチのあり方（パターン）の背景に、実は、各々違った階層に属する家々という異なる伝承母体が存在することを明らかにした。逆説的に見れば、小永田の正月の神棚の供えモチのあり方（パターン）の違いの本質は、正に、当地の社会構造を映し出すものであったのである。

キーワード

供えモチのパターン、社会構造、階層、文化と社会の相関

目次

Ⅰ　問題の所在
Ⅱ　方法
Ⅲ　小永田の概況
Ⅳ　小永田の社会構造
Ⅴ　小永田各戸の経済的階層帰属と供えモチの実態
Ⅵ　考察　―各経済的階層と供えモチのパターンとの相関―
Ⅶ　結語

Ⅰ　問題の所在

文化人類学は、異文化・社会の比較研究を指向する学問である。文化は、人間の行動を規制する価値観や世界観等、規範的な抽象であり、社会は、文化の保持、伝承母体となる人間関係に関する抽象であって、一般に、その編まれ方の特色を、社会構造という言葉によって概念化している。両者は人間の生活を支える二つの次元として、常に一体性を有しているのであり、ある民族（の一部の集団）の生活の特色を明らかにする上で、両者の知見の統合は、本来、不可欠な要件である。

筆者は、長らく日本の畑作農耕文化とその担い手である畑作農民の社会（畑作農村）に関心を寄せ、畑作農耕文化の体系化や地域性、畑作農村の社会構造の解明に微力を尽くしてきた。しかし、この分野の研究史を振り返る時、後者、並びに、畑作農耕文化とその伝承母体である畑作農村の社会構造との相関を問う取り組みは、未だに手薄であるとの認識を有している。

本稿は、こうした問題意識に基づいて、山梨県小菅村を構成する伝統的なムラの一つである小永田地区（以下、小永田）における正月の各戸の神棚の供えモチのあり方（文化要素である民俗の一例）に注目し、それと小永田の社会構造との相関を問おうとするものである。

後掲のように、小永田各戸の正月の神棚の供えモチのあり方（パターン）には、いくつかのバリエーションが認められる。なぜこうなるのか。実は、それぞれのパターンの担い手である家々は、経済力において違った階層に属している可能性があり、各々の経済力や重視する作物の違いを反映した供えモチのあり方を生み出して伝承してきたとの仮説を提起し、その検証を試みる。

Ⅱ　方法

筆者は、食や食材に関わる場面の全般を見渡しながら、特に食べることにまつわる慣習＝食制や、典型的には供え物として食物が儀礼的に用いられる場面＝食文化に注目し、そこから畑作に根ざした民俗を抽出したり、伝承母体のムラの社会構造との相関を考察する有効な視点として６項目を、既に提示している。[i]それらの内、

視点Ⅰ：　ハレの場面で米（特に水稲）やモチを重視しない儀礼の分析

視点Ⅱ：　ハレの場面で米（特に水稲）やモチを重視しない儀礼の背景にある論理の分析

であるが、この二つに基づいて、特に、小永田の各戸の正月の神棚の供えモチのバリエーションに注目する。

日本において正月は、森羅万象が蘇る神聖にして重大なハレの場面であり、それを担保してくれる歳神はじめ、様々な神々に対する敬意は極上のものとなる。そこで、正月の神棚には、それを象徴する最高・最良の供え物が選ばれねばならない。この点、一般には、古くから日本人の生活に深くコミットし、その豊作が期待されてきた稲とその加工品である白いモ

チが重視され、不可欠に重要な供え物の中心として認識されていると思われるが、小永田では、各戸でその実態には違いが見られ、米の白いモチを用いない例や、雑穀のモチを用いる等、象徴的には、必ずしも米の白いモチを重視していないとみられる事例が、少なくとも伝統的には繰り返されてきたことが確認される。世間一般とは異なる特色を示す注目すべき事実と思われるが、その背景に、ムラの社会構造との整合性があるとの仮説的な展望に立ち、第Ⅳ章で小永田の社会構造を確認した上で、第Ⅴ章では、小永田の各戸の神棚の供えモチの実態を明らかにする。その上で、第Ⅵ章で、両者の突合せを行い、相関性を考察する。

Ⅲ　小永田の概況

小永田は、山梨県の東端に位置する小菅村を構成する八つの地区（字、ムラ、自然村とみられる。以下、小永田、または、ムラと称する。）の一つで、長らく村の中心部から最も山奥に位置する袋ムラであった。2016年5月現在、自治会加入戸数は38となっているが、絶家や長期不在の家が増えており、現存する実質的な戸数は31と思われる。38戸の内、23戸がF姓であり、他にS姓（3戸）、KS姓（4戸）、A姓（1戸）、N姓（2戸）、FR姓（2戸）、H姓（1戸）、KW姓（1戸）、O姓（1戸）がみられ、これらがムラ組とみられる八つの隣保組に組織されており、葬儀等、近隣互助協同の中核として機能してきたことが知られる。伝統的な生業は、麦の栽培、並びに、アワ、キビ、ヒエ、サド、アカモロ、ソバといった雑穀の栽培による農業であり、特に、ソバは夏季に焼畑による生産が主体であった。この他、ジャガイモやコンニャク、ワサビの栽培、養蚕も多くのムラ人に記憶されていたり、現在も栽培されている。平地がない山間農村であり、田は昔からほとんど存在しなかった。これまでの調査から、財産保有や小作経験などの生業実態に照らし、家々に経済的な家格差が認められる。一方、大正7年（1918年）当時のムラの総戸数は39であり、その後、昭和56年（1981年）に、46戸まで増えたが、約1世紀の間、ほとんど変化していない。一つ一つの家が巧みに維持されてきたとみられる。総じて、山間過疎地の零細ではあるが、共同性の強い穀類を中心とした畑作農村の姿が浮かび上がってくる。

Ⅳ　小永田の社会構造

民俗調査[ii]、特に世帯調査のデータの分析から判明した当地の社会構造の詳細は、別稿[iii]を草しているので省略するが、要約すると以下のようになる。

当地の社会構造の重要な特色として、以下を指摘しうると考える。第一は、当地の出自集団には、同族的なタテの秩序は見出せず、規模も小さいことである。概して本家と分家の関係は互助的、仲間的である。第二は、親族として強く認識されているのは自己中心的に組織されるものであり、姻戚である。特に歴代の世帯主夫婦それぞれの姉妹の婚家、世帯主の配偶者の実家が重視されているとみられることである。第三は、生活上の様々な互助協同の主

力となるのは、姓横断的に構成されるムラ組としての隣保組と、水車を使いまわす仲間の家々とみられるが、その組織原理は対等な立場での参加であり、運営の原理が（輪番）交代制であることである。第四は、山中に麦の栽培に有利な土地を多く所有した家が経済的に優位に立ち、他の家を小作として雇うなどして、家格差を生み出してきたとみられることである。「貧乏人と楽人」という表現が伝承されているが、当地では、各戸の経済的な家格差を、相互に強く認識し合っていたとみられる。

本稿との関係で特に重要なのは、第四であるので、詳述しておきたい。当地の草分けの家々は、「コトマス（地名）七軒」と呼ばれる。多くのインフォーマントの言説から、その意味で一定の敬意を集めていることがわかるが、すなわち、財産もちというわけでもない。当地で、借金することなく日々生活できた家は、特定の3戸と伝えられている。その上で、相対的に裕福なのは、山林を多く所有していた家々と、換金作物となった麦の栽培が可能であった家々であり、特に、生育において日当たりが重要な麦の特色を反映し、山の南向きの斜面に多くの麦畑を持つことになった家々が、経済的に優位に立つことになったとみられる。この結果、他の家を小作として雇うといったことも生じたが、貧しい家を搾取するのではなく、各戸の没落を防いでムラ全体がうまく生きのびることができるように、持てるものによる援助の意味合いが強かったとする見解を述べるインフォーマントが目立つ。実際、貧しい家の子どもを寄留させ、面倒を見ることもあったことが把握されている。[iv]

結局、稲作ができない山間過疎地の零細な畑作農村であった当地では、「白い飯が珍しかった。」、「いつもソバがご飯のようだった。」、「ご飯を食べたいと思っていた。」といった言説に端的なように、米を日常的に食することができることは、一番の裕福さの象徴であったとみられる。それだけに、「米がとれないから麦をやる。」、「麦をやる家とやらない家があった。麦をやれない家は大変。」、「麦は日向でないとやれない。」といった言説に示唆されるように、麦は米の代用品として位置づけられ、それを栽培できるか否か、一段と栽培に適した耕地を有しているかも、各戸の裕福さを判断する指標になっていたとみられる。実際、当地では、米を手に入れる方法は購入しかないが、麦は換金作物でもあり、売りあげで米を購入することもできたのである。

また、日常食として重要な位置づけを与えられていたソバは、多くの家で、夏焼きの焼畑、当地で言うところの「夏刈り」によって栽培されていたが、山林が栽培地となった。それ故、自家の山林を有するか否かも裕福さを推し量る指標とされたのであろう。事実、筆者は、「（山林を持たないので）共有林を借りてソバを作った。」と語るインフォーマントにも間々出会った。

加えて、当地では、「サクダイ」、「ニンソク（人足）に出る・来る」といった表現も耳にすることが多い。小作が一定の歩合で年貢を納めるのに対し、「サクダイ」は、言わば賄い付きの住み込み労働であり、「ニンソク（一足）」は、借金の返済や年貢料の納入の代わり

に、労役奉仕することである。その経験の有無や多寡も、各戸の経済的な力量を測る目安になっていたとみられる。

これらを組み合わせると、当地の各戸は、経済的な観点から、以下のように、大きくは三つ、細かくは六つの階層に区分できるものと考える。筆者の聞き書きの印象からは、B-bとC-aあたりの違いは微妙と思われるが、ムラ内では、概ね上段の階層ほど裕福と見られていると思われる。

表１　小永田の経済的階層

階層		属性
大区分	細区分	
A： 借金せずに暮らせる	a	他者にお金を貸与可能
	b	自己資金だけで生活可能
B： 麦を栽培できる	a	小作、サクダイ、ニンソクの経験無
	b	小作、サクダイ、ニンソクの経験有
C： 麦を栽培できない	a	小作、サクダイ、ニンソクの経験無
	b	小作、サクダイ、ニンソクの経験有

Ⅴ　小永田各戸の経済的階層帰属と供えモチの実態

表2は、小永田の27戸について、世帯調査、並びに、聞き書きによる民俗調査から収集された経済状態に関するデータとそれを踏まえた経済的階層帰属、並びに、供えモチの実態を一覧にしたものである。第Ⅳ章に紹介した当地の社会構造の重要な特色の全般を理解する上で参考になると判断したことから、家格の違いや所属する隣保組についても紹介している。また、経済状態に関する一部のデータを収集できなかった家々もあり、これらの階層帰属については、やむを得ず大区分段階までの表示に留めている。

表２　小永田各戸の経済的階層帰属と供えモチの実態　　n＝27

隣保組	世帯番号	家格など	経済状態					階層	お供えモチ
			畑の有無	主要な栽培畑作物	山林の有無	小作・サクダイ			
						雇	被雇		
	12	本	有 （数ヶ	麦、ジャガイモ、コンニャ	20筆以上	有	無	A-b	米の白モチの

			所）	ク、ソバ					み
1	13	分/本	有（1町歩以上）	麦、コンニャク、ヒエ、アワ、キビ、小豆	15町歩	有	無	A-b	キビ・アワモチの二つ重ね
	15	分※商業	有（2ヶ所）	ジャガイモ、アカモロ、小豆	無	無	有	C-b	アワ・キビも搗くが米の白もち
2	21	分	有（数ヶ所）	コンニャク、ジャガイモ、アワ、キビ、ソバ（共有林）	無	無	有	C-b	アカモロ・アワ・キビも搗くが米の白モチ
	22	分◎	有（2反歩）	麦、コンニャク、大根、小豆、大豆、ワサビ、ソバ（共有林）	無	無	有	B-b	米の白モチ二つ重ね
	23	本◎	有（4反5畝歩）	麦、ヒエ、ソバ（共有林）	無	？	？	B	米の白モチとアワモチを並べて供える。
	31	分※大工	有（2ヶ所）	ジャガイモ、アワ、コンニャク、ソバ（共有林）	有（2ヶ所）	？	？	C	米の白モチ二つ重ね
	32	分	有（20～30坪）	ジャガイモ、サトイモ、雑穀	無	無	有	C-b	アカモロ・キビモチ二つ重ね
	33	本	有（数ヶ	麦、アワ、キビ、ジャガイ	有（一	有	無	B-a	下に雑穀の大

3			所）	モ	山）				きなモチ、上に米の小さな白モチ二つ重ね
	34	分	有（数ヶ所）	コンニャク、麦、ワサビ	有（3ヶ所）	?	?	B	米とアカモロを搗くが、米の白モチ
	Z2	本	?	?	?	?	?	A-a	?
4	41	分	有（数ヶ所）	コンニャク、アワ、キビ、ジャガイモ、モロコシ、ソバ（共有林）	無	無	有	C-b	特別に手に入れた米の白モチ
	42	?	有	アワ、キビ、アカモロ、モロコシ、ジャガイモ、ソバ（共有林）	有	無	有（専ら）	C-b	下に雑穀、上に米の白モチの二つ重ね
5	52	分	有（数ヶ所）	ジャガイモ、コンニャク、アワ、小豆、陸稲	有（数ヶ所）	無	有	C-b	雑穀の丸モチ二つ重ね
	53	?	有（1町歩）	麦、ジャガイモ、アカモロ、キビ、アワ	有（1町5反部）	?	?	B	米の白モチ二つ重ね
	54	◎※大工	有（3反歩）	ジャガイモ、コンニャク、サツマイモ、トウモロコシ、ソバ（共有林）	有（4ヶ所）	無	無	C-a	米の白モチ二つ重ね

6	61	◎	有（6～7ヶ所）	コンニャク、ジャガイモ、アワ、キビ、大根、ソバ（共有林）	有（3ヶ所）	無	有	C-b	？
	62	◎	有（数ヶ所）	麦、コンニャク、ジャガイモ、雑穀、ソバ	有（数ヶ所）	有	無	B-a	上に雑穀のモチ、下に米の白モチの二つ重ね
	64	分◎ ※商業	有（4ヶ所）	陸稲	有	無	無	C-a	上にミカンをのせた米の白モチ
	65	？◎ ※土建	有（7～8ヶ所）	コンニャク、ジャガイモ、雑穀	有（数ヶ所）	無	無	C-a	？
7	72	？	有	麦、アカモロ、キビ、ヒエ、ジャガイモ、大根	有	？	？	B	下に雑穀のモチ、上に米の白モチの二つ重ね
	81	孫分 ※炭焼きと林業	無	やっていない。	無	無	有 ※炭焼きのサクダイ	C-b	米の白モチ二つ重ね
	83	分 ※サラリーマン	無	ジャガイモ ※自家用栽培	無	無	無	C-a	米の白モチ
	84	分/本	有	麦、コンニャ	有	有	無	B-a	上が米

8			（3反歩）	ク、アカモロソバ	（1町歩）				モチ、下がアカモロの黒モチの二つ重ね
	86	？	無	ジャガイモ、サツマイモ、アワ、アカモロ	無	無	有	C-b	？
	87	分	無	キビ、アワ、アカモロ、小豆、大豆、ソバ（共有林）	無	無	有	C-b	上に雑穀のモチ、下に米の白モチの二つ重ね
	88	分 ※ 土建	無	ソバ（共有林）	無	無	無	C-a	米の白モチ

凡例　？：未調査または不明、本：本家、分：分家、分/本：分家であり本家、
孫分：孫分家、◎：ムラの草分けとされるコトマス七軒の可能性がある家、
雇：小作・サクダイ・ニンソクを雇ったことがある。
被雇：小作・サクダイ・ニンソクとして雇われたことがある。
※：農業以外の生業に主に従事、共有林：共有林の借用による。

Ⅵ　考察　―各経済的階層と供えモチのパターンとの相関―

表3は、表2を踏まえ、各経済的階層と供えモチのパターンとの相関を示したものである。供えモチの実態が把握できなかった3戸を除く24戸のデータを整理している。また、階層の細区分ができなかった事例については、「不明」という細区分を設けて分類した。表2に紹介した各戸の供えモチの事例を精査すると、以下の六つのパターンを抽出することができよう。

① 形や重ね方など、細部の違いはあっても、米のモチのみを用いるパターン
② 各種の雑穀のモチも搗くが、供えモチとしては、米のモチのみを用いるパターン
③ 米のモチと各種の雑穀のモチを用いて二つ重ねとするが、米のモチを上に置くパターン
④ 米のモチと各種の雑穀のモチを使用するが、両者を並置するパターン
⑤ 米のモチと各種の雑穀のモチを用いて二つ重ねとするが、雑穀のモチを上に置くパターン

⑥　雑穀のモチのみを用いるパターン

日本文化において、一般に、「のみ・だけ」は絶対性を意味し、「上」や「前」は優位性や優先性を象徴する位置であろう。すると、当地における供えモチのパターンは、①～⑥の順に、米のモチを価値的に重視し、それに対するこだわりや志向性の強さを示唆しているとみるのが妥当である。すると、①は米のモチを用いることに対する絶対的なこだわりを意味するものと考えられよう。逆に、⑤と⑥は、明らかに雑穀に対して優位な価値を承認し、それを表現しているとみられる。言わば、②～④は、米のモチに対する優位性を認めつつ、両者の中間的な様相を示すものと捉えられよう。表3はこのような認識を踏まえた分析枠組を示している。

表 3　経済的階層と供えモチのパターン　　n＝24

階層		米のモチ重視　←供えモチをめぐる価値観→　雑穀のモチ重視					
		供えモチのパターンと当該戸世帯番号（戸数）					
大区分	細区分	① 米のモチのみ	② 雑穀のモチも搗くが、米のモチのみ利用	③ 米のモチと雑穀のモチの二つ重ねであるが、米のモチを上に置く	④ 米のモチと雑穀のモチを並置	⑤ 米のモチと雑穀のモチの二つ重ねであるが、雑穀のモチを上に置く	⑥ 雑穀のモチのみ
A	a	Z2◎（1）					
	b	12（1）					13（1）
B	a			33,84 （2）		62◎（1）	
	b	22◎ （1）	15,21 （2）	42（1）			
	その他	53（1）	34（1）	12（1）	23◎（1）		
C	a	54◎*, 64◎*, 83*,88* （4）					
	b	41,81* （2）				87（1）	32,52 （2）
	その他	31*（1）					

凡例　◎：ムラの草分けとされるコトマス七軒の可能性がある家
　　*：農業以外の生業に主に従事

これを踏まえて、畑作農耕文化の伝承母体である畑作農村、すなわち、小永田の社会構造と当地に育まれた畑作農耕文化との相関を考察してみたい。この点に関わって、表3から以下を読み取ることができよう。

1）供えモチのパターン①は、階層A、B、Cいずれからも確認されるが、特に、ムラの草分けとされる家々と、農業以外の生業に主に従事する家々に顕著にみられる。裕福な階層であるAに属する家々がこのパターンを採用することは自然と思われるが、逆の立場にある階層Cに属する家々の事例は、一見する限りは矛盾に思われる。なぜであろうか。特に、階層Cに属する家々でこのパターンを採用しているのは、41番を除いてすべて後者に該当していることは注目されよう。階層Cは、言わば最も貧しい階層であるが、こうした家々は、現金収入を得やすい農業以外の生業に従事しており、それによってモチを購入しやすかったためであろう。農業に従事する階層Cの家々に一般的な慣わしとは考えにくい。表2を参照すれば、41番も特別なこだわりであえて米のモチを手に入れているとみられ、階層Cの家としては例外と捉えることが妥当と思われる。

2）1）を逆説的に捉えると、階層Cの家々の供えモチは、パターン⑤と⑥に収斂している。よって、階層Cの家々は、雑穀に対して優位な価値を与えてきたことがわかる。表2を改めて参照し、主要な栽培作物を確認すれば、雑穀が生活を支える上で不可欠に重要な役割を果たしてきたとみられよう。この結果、雑穀に対して育まれた深い敬意や感謝の念が雑穀のモチに反映するのであろう。

3）経済力的に中位にある階層Bの家々の事例が帰属するパターンには広がりが認められるが、中間的なパターンである②～④に収斂する傾向を認識することができよう。Ⅳ章で明らかにしたように、小永田の人々の潜在的な期待は米やモチに向けられてきたと見られることから、突出した豊かさはない状況の下で、正月という限られた重要な場面において、瞬発的に経済力の一部を活かし、理想の実現を目指そうとする心意が背景にあると考察する。

4）階層Bに属する53番の事例は、山林を比較的多く所有し、炭焼きや林業による現金収入が比較的多くあったためであろう。階層Aに属する13や階層Bに属する22の事例をめぐる解釈には、今のところ手がかりがない。例外的な事例と考察しておきたい。

Ⅶ　結語

小永田の社会構造における重要な特色のひとつと見られる各戸の経済的な家格差と、それに基づく階層の存在、並びに、正月の神棚の供えモチのあり方（パターン）をめぐるバリエーションの存在を最初に指摘したが、第Ⅵ章で考察したように、両者の間には、明らかな相関が確認された。民俗として伝承されてきたそれぞれの供えモチのあり方（パターン）の背景に、各々違った階層に属する家々という異なる伝承母体が存在したのである。すなわち、

逆説的に見れば、小永田の正月の神棚の供えモチのあり方（パターン）の違いの本質は、正に、当地の社会構造を映し出すものであったのである。

こうした成果も活かしつつ、畑作農耕文化とその伝承母体である畑作農村の社会構造との相関を問う研究を、一段と深化させていきたい。

i 立柳聡、博士学位論文「雑穀畑作文化論―東北日本畑作文化の地域性―」、1996年

ii 2015年7月から2017年2月にかけて、概ね筆者の単独調査として、2度の予備調査、4次に及ぶ世帯調査、村社の祭礼をめぐる参与観察、位牌分けや両養子慣行をめぐる補充調査を行った。

iii 立柳聡、2017年、「夫婦養子慣行の背景と機能―多摩源流域一山間農村の社会構造―」、『東洋大学大学院紀要　社会学研究科　福祉社会デザイン研究科』、第53集、東洋大学、pp.37-53

iv こうした点の概要は、以下において、検討した。

立柳聡、2016年、「世帯調査のデータとことわざが解き明かすこと－小菅村小永田の社会構造－」、NPO法人郷土のことわざネットワーク・ことネット、『ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生』、人間の科学新社、pp.214-227

Sonaemochi (A Folklore, Rice Cake Enshrined on Household *Shinto* Shrine on New Year' s Day) as the Symbolism of Social Structure: Based on Example of a Community located in the Tama Headwaters in Eastern Yamanashi Prefecture

TACHIYANAGI, Satoshi

Abstract

When rethinking on the research history of culture and society based in dry field farming, we perceive that researches on the interrelation between folklore and social structure are lacking and it is a subject. So In this paper, I will be approaching to that.

Konagata where I researched, located in the Tama Headwaters is a community formed on dry field farming. In here, the actual state of *sonaemochi* in each household is variously. But they are classified into three patterns approximately as the following.

Pattern 1: made by only rice

Pattern 2: made by to mix rice and millet

Pattern 3: made by only millet

On the other hand, each household is divided into three classes based in financial power as the following:

Class A: possible to keep out of debt

Class B: possible to raise wheat

Class C: impossible to raise wheat

By my research, it is cleared to correspond in a general way with three patterns and three classes. That is to say, households belonging to class A make pattern 1. The class B makes pattern 2 in the same way. The relation between the class C and pattern 3 is also.

Like this, I proved the interrelation between folklore and social structure in *Konagata*.

Key words: patterns of *sonaemochi*,, social structure, classes, the interrelation between folklore and social structure